

令和 4 年度 第 2 学期終業式

R 4 (2022) 年 12 月 21 日

みなさん、おはようございます。今日は、2 学期終業式の校長講話として、中村 哲さんという方の人生を紹介したいと思います。

多くの生徒が 中村 哲さんのお名前は聞いたことがあると思います。アフガニスタンの国民、難民のための医療活動、灌漑事業など、国際的な人道支援に多大な貢献をされました。にもかかわらず、2019 年、アフガニスタン現地で武装勢力に銃撃され、73 歳で亡くなりました。

中村さんは、もともと脳神経が専門の医師で、アフガニスタンでハンセン病の治療にあたっていました。

アフガニスタンは2001 年9 月11 日、「9.11 アメリカ同時多発テロ事件」に関係する組織の本拠地とみなされ、激しい空爆と地上攻撃を受けました。また、2000 年頃から厳しい干ばつに襲われ、豊かだった農地は砂漠化し、栄養失調、脱水症状、赤痢で倒れる子供たち、大人が後を絶たないという悲惨な状況になってしまったのです。

水さえあれば救われたはずの命が空しく奪われていく現実を目の当たりにして、中村さんは、医療よりも人々の飢えと渇きを癒すことが先決と考え、井戸掘り事業を始めます。

このようななか、2002 年12 月、その前年に脳腫瘍と宣告され闘病していた当時10 歳の中村さんの次男の病状が悪化し、中村さんは急遽帰国します。普通の鎮痛剤が効かなくなってしまい、痛みを苦しむ息子を見るに見かね、中村さんはサリドマイドという非常に強く、しかし、かなり危険な薬をあえて入手しようともします。

息子さんが亡くなったのは12 月27 日の深夜。翌朝、中村さんは、庭の冬枯れの木立の中に、一本だけ若い肉桂という常緑樹が立っているのを見ます。ちょうど次男が生まれた頃、野鳥がどこからか運んできた種が芽を出した記念の樹でした。「この樹はお前と同じ歳だよ。」と息子さんに話してきた事を思い出します。同時に、中村さんはもうひとつ思い起こします。それは、アフガニスタンで母親が病気の我が子を抱きしめ、何日も歩いて診療所にたどりつく姿です。診察を待つ間に母親の胸の中で死んでゆく子供も珍しくありませんでした。中村さんは、陽射しを浴びて立つ肉桂の樹を見つめながら、「見とれ、おまえ（息子）の弔いはわしが命がけでやってやる。」と決意します。

中村さんは、後年、こう話しています。「次男の死で、空爆と飢餓で犠牲になった子供の親の気持ちが、私にはいつそうわかるようになった。私は、この不条理に一矢報いることを誓った。武器なき闘いだ。」

2003 年3 月、中村さんは現地事務所の職員を集めて重大発表をします。「今、どれだけのアフガン人が故郷で安心して暮らせるだろうか。食べ物はなし、職はなし、カネはなし、水さえもない。干からびた大地を緑に変え、本当に実のある支援を私達は目指す。そのため、用水路を建設し、豊かな故郷を取り戻す。」

このようにして、中村さんの「武器なき闘い」は始まりました。しかし、中村さんは土木についてはまったくの専門外。川の流量計算や流路設計についての書物が理解できません。書かれてある数式を理解するために、中村さんは高校生の娘さんから数学の教科書を借りて一から勉強し直しました。まったくゼロからのスタートだったのです。しかし、多くの人と出会い、その助けを得て、自らもいろいろな川を見て回りながら研究を続けます。そして、大小の石を水流に対して斜めに敷き詰めることで、川の勢いを抑えつつ、用水路に水を導く、「斜め堰」と言われる、日本の伝統的な工法にたどり着きます。

中村さんは、現在の日本の土木技術をそのまま活用することはしませんでした。それでは、壊れたときに現地の人たちが修理できないからです。もともと現地には、石を上手に切り出し、それをきれいに積みあげる古くからの工法がありました。中村さんは、この工法と日本の伝統的工法「斜め堰」を融合させたものならば、壊れた時に現地の人々がすぐに修理できると考えたのです。さらに、中村さんは護岸にヤナギやオリーブの樹を植えました。それは長く伸びた根が護岸をしっかりと守るという、日本の昔ながらの知恵でした。中村さんは現場を指揮しながら、自らブルドーザーで石を運び、「斜め堰と用水路」を作りあげていったのです。

中村さんは、「ひたすら現地の人々の立場に立ち、現地の文化や価値観を尊重し、現地のために働く」という意味で、自分を含めて現地の作業員を「現地ワーカー」と呼びました。「ボランティア」という言葉を中村さんは嫌いました。

日本からやってきた若者たちが、「よい体験をさせてもらいました。」「よい思い出になりました。」などと言うのはなじめなかったと中村さんは言います。「そんなセリフは止せ。君らのロマンや満足のために仕事があるのではない。」と叱ったこともあったそうです。

「自分達は何も思い出づくりや人生の悟りを開くために生きているのではない。それらは、文字通り我を忘れて打ち込んで、必死で生きた後に、結果として得られるものなのだ。」と中村さんは話しています。

「マルワリード用水路」と名付けられた、中村さんはじめ「現地ワーカー」が心血を注いだ用水路は、2003年3月の着工から6年と5ヶ月を経て、2009年8月3日に開通しました。全長24キロメートル、実に3000ヘクタールの農地を回復し、さらに広大なガンベリ砂漠をも開拓するものでした。死の谷が豊かな緑地となり、何万人もの人々の生活が回復しました。「百の診療所よりも一本の用水路」をスローガンに中村さんが取り組んだ大事業でした。しかし、まだまだ干ばつと貧困にあえぐ多くの人々がアフガニスタンにはいます。息子さんが亡くなった時に誓った中村さんの「この不条理に一矢報いる武器なき闘い」は、これからも続くはずでした。

その道半ば、2019年、中村 哲さんは現地の武装勢力の銃撃で亡くなりました。しかし、35年にわたる中村 哲さんの「この不条理に一矢報いる武器なき闘い」は、「現

地ワーカー」によって受け継がれ、今、なお続いています。

中村 哲さんの人生、皆さんはどう思いますか。中村さんの圧倒的な人生の在り様の前では、どんな言葉も陳腐なものになってしまいます。

ただ、それを承知であえて言うなら、今年度に入り、今日のような始業式、終業式の校長講話で私が皆さんに伝えてきた事すべてが、中村さんの人生には強く貫かれていると感じます。だからこそ、中村 哲さんの人生を紹介しました。

これまでの校長講話で話してきた内容は主に3つです。

1. 「切に生きる。」・・・人は誰でも何らかの事情を背負っている。事情を背負いながらも、絶望せず、自分に都合のいい言い訳をせず、今、目の前に在ること、今、自分ができにことにひたすらに努力していく。

2. 「念ずれば、花開く。」・・・自分は「こうしたい。こうなりたい。」という強い思い、願望を持ち、持ち続けること。その強い思いで自らを奮い立たせながら、計画を立て、具体的な行動に移し、粘り強く実践していく。そうして、花は開く。

3. 「自信と謙虚のあいだで、一生懸命生きる。」・・・社会に通用する態度として大切なのは「謙虚さ」。心にわだかまりが無く、今の自分の心と向き合いながら、うぬぼれず、卑屈にならず、自信と謙虚のあいだを一生懸命生きていく。

令和4年、2022年は、まもなく終わります。今年も新型コロナウイルスの感染状況に大きく影響を受けながらの学校生活でした。しかし、この1年、自分はどう生きたのか。どのような高校生活を過ごせたのか。「切に生きる」ことができたか、強い願望を持って自らを奮い立たせながら頑張れたか。謙虚な姿勢を大切にしていたか。この令和4年をあらためて振り返り、それを来年に活かして欲しいと思います。

最後に、3年次生の皆さんに話します。年が明ければ高校生活も実質残り1カ月です。進路が決まった人は、残された時間を新たな一步に向けて有効に使ってください。進路を決める勝負がこれからの人は、とことん努力すること。実力は最後の最後まで伸びます。年があけると、すぐ大学入学共通テストです。勝負がかかっている人はもちろんですが、進路がすでに決定したうえで受験する人は、自分にはその大学へ行くに足るべき学力が本当にあるのか。その大学に一般入試を闘って入学してくる学生と対等に学んでいけるのか。それが問われる試験として出来る限りの努力をして挑戦して下さい。自らに厳しく、自らを奮い立たせながら挑戦してください。

全生徒の皆さん。新型コロナウイルスをはじめ自分自身の健康と安全には十分留意し、新年、令和5年、2023年の3学期、元気な皆さんと会えることを楽しみにしています。

皆さん、良いお年を。